



Title	Because X構文の歴史的変遷について
Author(s)	岡田, 禎之
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2021, 61, p. 23-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81511
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Because X 構文の歴史的変遷について

岡田 禎之

0. はじめに

筆者は拙論（2020）において、近年インターネット環境で多用されている *because X* 型の表現について、その生成過程を仮説として提示した。*because* が節を取る形式と *because of* NP の形式の両方を持つことから、この両者が入力となって部分的に融合され、新しい構造が生じ（*because* NP 形式）、その後、前置詞 *of* が不在となったことから補部のカテゴリーが名詞句に制限される必要はなくなり、その結果として *because X* へと発展していったと筆者は考えた。しかし、一方で Bergs（2018）は *because X* 型の表現が形容詞補部からスタートしたのではないかと考えている。拙論（2020）においてはこの問題については議論することができなかったため、本論では、この新形式は形容詞補部ではなく、名詞句補部からスタートし、現在の形に発展してきたものであると考えられることを示していきたい。ここでは、Oxford English Dictionary（OED）、Corpus of Historical American English（COHA）、Corpus of Global Web-based English（GloWbE）からのデータを中心として、検証を進めていく。

本稿は、まず1節で *because X* 構文の成立過程の仮説を示し、2節で Bergs（2018）の考えを提示する。その後3節で OED における *because X* 構文の検証を行い、4節では COHA、5節では GloWbE のデータ検証を行う。6節は全体のまとめである。

1. *Because X* 構文

近年ブログなどのインターネット環境を中心に、*because* が名詞や形容詞、副詞などを直接従える *because X* 構文（Bergs 2018, Bohmann 2016, Kanetani 2015, 2016, 2019, McCulloch 2013, Pullum 2014, Schnoebelen 2014, Whitman 2014 など）が注目されている。(1) および (2) に例を挙げておく。この形式の発生については不明な点が多いが、筆者は拙論（2020）において図1のような formal blending の一例としてこの構造を捉えることを提案した。

- (1) a. I cannot go out today **because homework**. (Kanetani 2015: 63)
 b. A: I definitely kind of viewed him as a suspect.
 B: Why?
 A: Well, **because motive**. (Carey 2013)
- (2) a. She just replied me to tell me that she's doing some house cleaning. Could not reply me for two days **because busy**. (GloWbE Singapore)
 b. When Gerwig was pitching the film, she did so to mainly male producers who sometimes asked, "Do women fight like this?" "And it was like, 'Oh, do you not have daughters?'" says Gerwig. "**Because yes**."
 (Corpus of News on the Web (NOW) South Africa)
 c. Let me guess the answer: all the bad things happened because of Bush, Obama/Clinton/Kerry were given a very bad position and kept things from going even worse, and we need to continue the policies **because shut up**. (NOW United States)

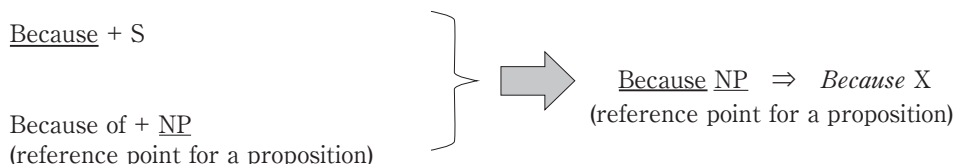


図1 Formation of *Because X*

(Turner & Fauconnier 1995, Barlow 2000に見られる formal blending の一例)

because は、文を従えるか of 句を従えることになるが、前者の場合統語的に命題を構成する内容が後続することになり、後者の場合には、統語的にではなく、概念的に命題を想起させる reference point (Langacker 1993) としての名詞句が後続することになる。つまり、because の補部には、統語的もしくは概念的に命題内容が登場するのであり、この2つの形式が入力となり、新しい融合形式が登場したのではないかと考えている。ここでは、タイプの異なりはあっても、命題内容を表すという点において because +S と because of NP に等価性が認められる、ということが形式融合の一つの前提条件になっているものと思われる。

さて、このような新形式の登場は、formal blending の一例であると考えられるが、この現象は以下のように規定されている。

- (3) Blending involves partial projection from two input structures to create a third structure; often, a single element in the blend corresponds to elements in each of the

inputs. ...it (the blend) has a life of its own in the sense that it contains structure that is not calculable from the inputs and that it can be developed, once it is set up, on its own terms. (Turner & Fauconnier 1995: 202)

(3) では、一端新しい形式が成立した場合、それ以降は独自の発展を見せ始めることがあるとされているが、*because X* はまさにその様な形式であると考えられる。2つの入力から融合によって得られる新形式は *because NP* である。しかし、*because* の補部に名詞句がくるという制限は、*of* という前置詞の存在によって求められたものであり、この要素がなくなった以上、補部にくる要素は命題を間接的に想起させる *reference point* として機能するものであれば何でも良いはずであり、現にその様に制限が緩められて、様々な範疇要素が登場するようになったものと考えられる。拙論 (2020) では、このように考えた。つまり、*because X* は NP 補部からスタートし、他のカテゴリー要素へと拡散していった、という発展経過を考えたのである。

2. Bergs (2018)

これに対して、Bergs (2018) は、COHA などのデータを部分的に調査した結果として、この構造は「形容詞」補部を端緒として、名詞範疇やその他の範疇にそこから広がったと考えている。

- (4) a. "...the *because* + AdjP combination can be traced back at least to the early nineteenth century." (Bergs 2018: 44)
- b. "*Because* + NP combinations seem to be rarer in the history of the language. In COHA only one clear example can be found, from 1940." (ibid. : 45)
- c. "...the construction started with a few individual tokens of the *because* + A kind... *Because* + N was then formed, probably by analogy..." (ibid. : 51)

Bergs がこのような考えに至った根拠となったデータは以下のようなものである。

- (5) a. be sure that there is a canker somewhere, and a canker not the less deeply corroding **because** [it is] **concealed**. (Charlotte Brontë, *Shirley* 1849)
- b. This would at least be honest, though I think it would be unwise, **because** [it is] **unnecessary**. BETTER TO GIVE EVERYBODY A FAIR CHANCE. (COHA 1820)

(this/it= 黒人参政権を認めない代わりに、議員を人口比に合わせて選出する方法)

c. ... And a Bostonian, appeals to history, and shows that Boston is first, because [it is the] oldest. (COHA 1823) (Bergs 2018 : 44-45)

(5a) は Charlotte Brontë の小説の一節であり、あとは COHA からの用例である。このような例が多く認められ、一方で名詞が because の補部として単独で生起しているのは 1940 年代ようやく認められる (4b) としている。しかし、Bergs は COHA の一部の例を調査しているのみであり (because _NN* . や because _J* . などの検索形式で、文末に単独補部が登場する事例のみを確認している)、広範な調査を行ってこの結論に至っているのではない。

because は因果関係表現の中でも極端に使用頻度が高いものであり、この用例をすべて確認していくことなど到底不可能であるが、しかしもう少し検索の範囲を広げて確認してみることは必要であると思われる。また 19 世紀以降のデータのみを扱っている COHA では、十分なデータ検証は行えないと思われるため、OED や歴史的コーパスなどの調査も必要となるはずである。本稿では、OED (Version 4.0 on CD-ROM) に登場する because の citations をすべて確認し、また COHA と GloWbE のデータを追加調査することで、より広い検索範囲における調査を行うこととした。この結果からは全く異なった状況が得られるのである。

もう一つ、(5) のデータを見ていて気になるのは、これらのデータはすべて「主語 + 繫辞動詞」が省略された用例であることである。しかも、省略されていると考えられる主語要素は主文の主語と同一のものである。なお、(5c) の最後の it is the oldest は前の文 (Boston is first) とのリズムの関係で the はカットされる方が語呂が良く、the が入るとリズムが崩れるので良くない、との反応が得られた。したがって、単に「主語 + 繫辞動詞」だけが欠落しているのではない、と考えられるが、文のリズムという特別な要因が動機となってさらに省略が進んだものと考えられる。

さて、(5) にあるような削除現象は、従属節においてはよく観察されるものであることにすぐに気がつく。

- (6) a. **Although no longer a minister**, she continued to exercise great power.
 b. **Once away from home**, she quickly learned to fend for herself.
 c. He can be very dangerous **when drunk**.
 d. **While in Paris**, I visited Uncle Leonard.

A finite clause can be reconstructed by adding a subject and a form of the verb *be*:
although she was no longer a minister, and so on.¹⁾

(Huddleston & Pullum 2002: 1267)

(6) にあるように、従属節においてはこのような主語と繫辞動詞の省略は頻繁に認められるものであり、何ら珍しい現象ではない。このときには、残留要素として残るものは接続詞と述語形容詞句（分詞句）、述語前置詞句や述語名詞句となる。(5) に挙げられている事例は、これらの削除が *because* にも適用された事例というだけであり、*because X* に認められるような自由な reference point 要素の出現事例とは大きく異なると筆者は考える。(1) や (2) のような事例は、「主語＋繫辞動詞」の省略という範疇に収まるものではない（ただし、(2a) は形容詞が残留しており、「主語＋繫辞動詞」の省略と考えることができる。Bergs (2018) はこのタイプの事例を多く観察していたのではないかとと思われる）。

ちなみにこのような「主語＋繫辞動詞」の削除が少なくともいつ頃から認められるものであるのかを OED のデータでいくつか拾ってみると、以下のような例が認められる。

(7) OED に見られる subordinators における繫辞動詞の削除

a. *while* B conj. and prep. 1

Often with ellipsis before a pple. or other predicative word or phrase, e.g. *while walking, while at rest, while an infant*.

1591 While [they were] in ambushment close they lay on land.

1611 Quhil in this weak estait, all meanes I soght To be aweng'd on him.

(While [I was] in this weak estate, all means I sought to be avenged on him.)

b. *when* II 4.

... Also ellipt. With only the predicate expressed, e.g. *when a boy*=when he (I, etc.) was a boy; *when cold* = when it is cold.

1643 God takes his opportunity, (for we are best, **when at worst**).

1775 It was by being attacked **when asleep**...that the gigantic Polypheme fell a sacrifice to Ulysses.

while/when の例をみると、少なくとも 16 世紀終わり頃にはこのような形式は存在していたようである。このような状況から、*because* に関しても、16 世紀頃には既に同様の表現方法が認められていたのではないかと、という予測が成り立つ。つまり、Bergs (2018) が提示している (5) のタイプのデータ類は、かなり早期の段階から存在していた可能性があると思われるのである。このような状況から、本稿では OED の citations に現れる *because* の用例をすべて確認し、分布状況の確認を行った。²⁾

3. OED における *because* X の分布

OED の用例を確認していくと、やはり *because* X 的表現はかなり古くから存在していることが確認できる。以下ではまず *because* が節ではなく句表現を直接後続させている用例のみを取り出し、その補部の品詞によって分類し、各年代別の頻度を表として提示していく。補部要素として登場しているものは、過去分詞、現在分詞、形容詞、名詞、副詞、前置詞の 6 種類である。

以下の表の中で縦軸にある「主語」は、主節主語と同一指示になる「主語＋繫辞動詞」の省略の場合、「目的語」は、主節目的語と同一指示になる「主語＋繫辞動詞」の省略の場合を指す。「等位的」は、*because* が等位接続的に用いられた用例のことで、(15)–(17) および (23) で後述する。「現代的」は、*because* X 構文に認められる、「主語＋繫辞動詞」の省略とは考えにくい、その範囲を超えた reference point 的な用例のことである。

(8) OED における *because* の補部

過去分詞	1550~	1600~	1650~	1700~	1750~	1800~	1850~	1900~	1950~	total
主語	2	11	16	17	5	9	21	3	1	85
目的語		1	6	2	1	1	2			13
現在分詞	1550~	1600~	1650~	1700~	1750~	1800~	1850~	1900~	1950~	total
主語			2	3	1		3	1		10
目的語		1	1							2
形容詞	1550~	1600~	1650~	1700~	1750~	1800~	1850~	1900~	1950~	total
主語	4	7	12	8	1	10	12	4		58
目的語		2	1							3
等位的			1		3	2	5	1	1	13
名詞	1550~	1600~	1650~	1700~	1750~	1800~	1850~	1900~	1950~	total
主語	2	8	6	1		1	1			19
目的語	1	1								2
現代的		2	4				1		1	8 (+2)
副詞	1550~	1600~	1650~	1700~	1750~	1800~	1850~	1900~	1950~	total
主語		1								1
等位的			1			3	1			5
前置詞	1550~	1600~	1650~	1700~	1750~	1800~	1850~	1900~	1950~	total
主語			2	1			1			4

以上の表から得られる事実として、過去分詞や形容詞の用例が多いこと、名詞の用例は数が

限られていること、その一方で現代的な用例は名詞グループにのみ確認できること、が挙げられる。

先述のように、「主語＋繫辞動詞」を省略することによって、残留するのは述語要素であることから、形容詞や分詞類が高頻度で現れることになる。名詞も、述語名詞として機能することができるが、名詞類の中でも限られた要素だけが述語名詞として適切に機能できることから、その使用には制限があり、頻度はそれほど高くならないと考えられる。このような状況が、Bergs のデータ観察に影響を与えたのではないだろうか。

その一方で、このような従属節に広く認められる形式から外れた reference point 的な用法が名詞グループに早くから認められることにも注目する必要がある。この分布状況から判断して、やはり名詞補部からこの構造は始まったものであって、その後他の範疇要素にも拡散していったものと考えられる。

以下、それぞれの品詞グループの用例について確認していくこととする。まず最も頻度の高い過去分詞のグループと、それに続いて現在分詞のグループである。

(9) 過去分詞が補部 (主節主語と同一)

1592 Great houses long since built Lye destitute and wast, **because** [they were] **inhabited by Nobody**.

1647 Yet from intercision, prolapsion, from utter and irrecoverable falling away, they are freed, **because** [they are] **founded upon a Rock**.

1658 Yet are their rivers and rivulets replenished with trout **because** [they are] **undisturbed with the noosy net**.

(10) 過去分詞が補部 (主節目的語と同一)

1641 I finde some others unpriested by Councells **because** [they are] **ordained by Presbyters alone**.

1667 He that will throw away a good book **because** [it is] **not gilded**, is more curious to please his eye than understanding.

(11) 現在分詞が補部 (主節主語と同一)

1661 [He was] A Swaggerer, so called, **because** [he was] **endeavouring** to make that Side to swag or weigh down, whereon he ingageth.

- (12) 現在分詞が補部（主節目的語と同一）

1634 Nicanor slew Antiochus, because [he was] **interposing** the view of his ambition.

現在分詞の例（11）においては、主節の「主語＋繫辞動詞」も省略されていると考えられる。このタイプの例文もいくつかあり、特に次に登場する形容詞グループには多く認められるものであるが、従属節部分に関しては他の事例と変わらず「主語＋繫辞動詞」の削除が行われていると考えて差し支えないものと思われる。

つぎに形容詞が補部にくる場合であるが、(13) では先述の通り主文の主語と繫辞動詞も省略されている。つまり、(13) の最初と二番目の例文では「形容詞 because 「形容詞」という連鎖になっている。これらは、主節と従属節に並行的に削除が適用された事例であると考えることができる。

これと形式的に似ているのが、等位的な用例である。違いは、because によって接続された形容詞がさらに後続の名詞を修飾する、という関係にあることである。(15) に例を挙げる。

- (13) 形容詞が補部（主節主語と同一）

1586 [X is] Waiwardly proud; and therefore bold, because [X is] **extreamely faultie**.

1597 [X is] Bald, because [X is] old, [X is] old, because [X is] **living long**.

1599 Persius is crabby, because [he is] **auntient** (ancient) and his ierkes · · dusky.

- (14) 形容詞が補部（主節目的語と同一）

1634 Turkes and Persians, both whom in all occasions were insulting over them, because [they were] **indefensive and without government**.

1654 Such is the irregularity of Custome, it doth not extoll things because [they are] **worthy**, but thinks them worthy, because they are extolled.

- (15) 形容詞が補部（等位的用法）

1660 Thy humane traditions, and [**unauthentick because uncatholick**] observations, instead of Christ's institutions.

1796 The unsuspecting frankness of an [**unguarded, because innocent**] nature.

この（15）のような事例は、though という従属接続詞に認められることはよく知られており、学習用辞典などにも記載されている（小学館『ランダムハウス英和大辞典』第2版、

研究社『新英和大辞典』第六版など)。(16)にあるように、これらの用例は、矢印で示したパラフレーズが可能であり、2つの節をつなぐ文形式と解釈することが可能である。このようなパラフレーズが認められるのであれば、この等位的な用法も、「主語＋繫辞動詞」の削除に関わる特殊な事例とみなすこともできると思われる。

(16) 等位接続的な用例 (though)

a. That was [a small though comfortable house].

⇒ That was a small house though [that was] a comfortable house.

b. He was [a stern though fair teacher].

⇒ He was a stern teacher though [he was] a fair teacher.

同様に、because が関わる等位構造的な事例についても、(17) のようなパラフレーズをもとに「主語＋繫辞動詞」の削除が関与する特殊事例と考えて良ければ、(13) と同列の用例とみなすことができる。なおこのような because の用法については、これまで余り多くのことは述べられてきていないと思われるが、後の COHA や GloWbE のデータ検証でも、無視できない数の用例が認められ、決して例外的な事例ではないと思われる。このような事例の存在についてはまた改めて考察してみたいと考える。

(17) because の場合³⁾

1879 If it be soft, broken granite ... will prove [a useless because an unendurable surface].

⇒ If it be soft, broken granite ... will prove a useless surface because [it is] an unendurable surface.

1912 This style [of pottery] was found in the [important because well-stratified site] at Phylakopi. (ミロス島のフィラコピ遺跡)

⇒ This style of pottery was found in the important site at Phylakopi, because [it was] a well-stratified site.

次に見るのが、名詞が補部になるグループであるが、主節の主語や目的語と同一の意味上の主語と繫辞動詞が省略されている例が (18), (19) である。問題は、その後にある、現代的な reference point 的な用例であるが、これに関しては、(8) の表にも「8 (+2)」と記載した。これは、17 世紀以前にも 2 件の用例が確認できるものの、これら 2 件についてはカウントしない方が良いと判断したことによる。まず (20) には、(+2) としてカウントしな

いことにした2例を挙げておく。

(18) 名詞が補部 (主節主語と同一)

1596 He is likewise called Sathan, because [he is] an aduersary: ··and Belial, because [he is] yoakles.⁴⁾

1638 The fire of Purgatory is rightly termed ··Chymericall, because [it is] a meere fiction.

(19) 名詞が補部 (主節目的語と同一)

1598 One thinkes it misbeseeming the Author because [it is] a Poem, another vnlawfull in it selfe because [it is] a Satyre.

1640 In some places of Essex they call it Hartwort, because [it is] heart burne or paines of the heart.

(20) 名詞が補部 (現代的用法) データからは除外した2例

a. 1384-5 Of faldgabul nothing, because no fold. Of Wodewexen nothing, because it (1892) was depastured by the Lord's sheep. Of pasture in le Coumb, whereof 7s is customably rendered to the lord, nothing, for the cause aforesaid.

(published by the Camden Society in 1892)

b. 1483 We wold haue ··drowned yow by cause your dissolute & oute of tyme ianglyng. [because your dissolute and unreasonable jangling]

(20a) は 1384-5 に Wynttenham の執事 (代官) 役であった John Bolt の会計記録文書の一節である (*Accounts of the Obedientiars of Abingdon Abbey* 所収)。この一節の最初の文が OED の用例として採用されている。豚を森で飼うための権利金やビールを売るための権利金についての記述の後に出てくる部分になる。ここでは会計項目と収支、その理由という3つの要素が並置される形で会計報告が続けられている。羊囲いの使用料については収入はゼロ、羊の群れがいないから。ヒトツバエニシダ (染料として使った植物) についても収入はゼロ、領主の羊に食べ尽くされてしまったから。Le Coumb の牧草地、7 シリング分は課税対象として領主に提供しているものだが、これも収入はゼロ、上記の理由によるもの、と続いていく。Camden Society が 1892 年に出版したものであるがテキストは 14 世紀の内容とされている。しかし、明らかに現代語に直されたテキストと考えられる。たとえば、depasture という動詞は OED では 1586 年初出とされているし、Middle English Dictionary には全く登場してこない。この時代の表現ではないと考えられるのである。Camden

Society の編者たちが改編していると考えられるため、データとして利用することは差し控えるべきと判断した。

(20b) は William Caxton の *The Golden Legends* Vol.4 Here Follows the Assumption of the Glorious Virgin Our Lady St. Mary の一節である。ただし Fordham University (<https://sourcebooks.fordham.edu/basis/goldenlegend/GoldenLegend-Volume4.asp#Assumption>) や Intratext.com (http://www.intratext.com/IXT/ENG1293/_P5Z.HTM) の電子版データでは、because of your dissolute and out of time jangling と書かれている。古いテキストについては、記録者によってテキストの記載内容に異なりが見られたりすることはあるので、この事例についてもデータとして利用することは見送るべきと考える。⁵⁾

これらの例を排除すると、17 世紀以降に reference point 的な用例が出てきているのであるが、すべて名詞補部に限られていることは注目に値すると思われる。やはり名詞（しかも名詞句）補部がこのタイプの表現の最初の事例だったのではないかと考えられる。

(21) 名詞が補部（現代的用法）

- 1622 Shall I wasting in Dispaire, Dye **because a Womans faire** ? (fairness)
- 1643 The Chaos: wherin··to speak strictly, there was no deformity, **because no forme**.
- 1655 And now was not Waltham highly honoured·· when amongst those fourteen [Commissioners], two were her Gremials, the forenamed Nicholas living in Waltham, and this John, having his name thence, **because birth therein**.
- 1665 I··think my Tuesday letter was miscarried, **because no Answer** to it.
- 1673 From the manufacture—he will criticise **because not** [from the] **orifature**—of soape-bubbles. (A. Marvell の文章 The Rehearsal Transposed. より)
- 1678 James Clerk was pursued, **because a Sword being sent by Cuthbertson to Moubray a Sword-slipper** [etc.].
- 1870 Gideon's for long unconfiding and undutiful **because unbelieving demeanour**.
- 1969 'Alors bye-bye,' she was saying·· That awful way French women had on the phone, using idiotic franglais phrases like '**because le job**'. (フランス人の発話)

1622 年の例は George Whither の詩の一節である。poetryfoundation.org (<https://www.poetryfoundation.org/poems/45510/shall-i-wasting-in-despair>) のテキストでも because a woman's fair となっているので、because が直接名詞句を後続させている例と考えて良いと

思われる。裸名詞が単独で生起していると思われるのは 1673 年の例であるが、これも名詞 (orifactory) の補部が先行する名詞 (manufacture) の補部と共通する要素 (of soape bubbles) であることから、等位構造縮約が適用されたものとみることできる。もしそう考えて良いなら、この事例においても、because の補部は名詞句を構成していると考えることができる。すると、すべての用例において、名詞には何らかの限定要素 (冠詞、前置 (または後置) 修飾要素など) が付随し、句を構成していることがわかる。つまり、because NP の形式が reference point 的用法の最初にあったと考えられるのである。

以下、表 8 の内容を確認する上で、補部が副詞の場合と前置詞の場合の用例だけを挙げておく。

(22) 補部が副詞 (主文主語と同一)

1606 Aene. . . Where~fore [are you] not afield?

Troy. Because [I'm] not there; this woman's answer sorts.

For womanish it is to be from thence.

イーネアス：戦場へはなぜ (行かないのですか) ?

トロイラス：行かないから行かないのだ。そういう女のことがふさわしいだろう、戦場に行かない女々しい男には。(『トロイラスとクレシダ』小田島雄志 (訳) 1985 白水ブックス シェークスピア全集 24)

(23) 補部が副詞 (等位的用例)

1678 This they do [most slow Because most choicely].

⇒ This they do most slow because [this they do] most choicely.

1800 It had been [most uncandidly, because untruly] argued.

⇒ It had been most candidly argued, because [it had been] untruly argued.

(24) 補部が前置詞 (主文主語と同一)

1658 The out-setting Deer is observ'd to be lean . . . because [it is] always in fear

(23) は等位的用例のため、パラフレーズ内容を記載しておく。ここでは副詞が等位項になるので、その副詞が修飾する対象は名詞ではなく動詞になる。このことから、(17) の場合と必ずしも同じパラフレーズが得られることにはなっていない点に注意が必要となる。しかしここでも先行文脈から復元可能な要素の省略であると考えることができる。

OED の例文検索から得られる分布状況をまとめると、以下のようになる。

- (25) OED では、形容詞（過去分詞・現在分詞）の補部事例が多く、主文の主語（または目的語）と同一指示になる意味上の主語と繫辞動詞が削除されている場合がほとんどである。ただし、形容詞および副詞には等位的用例も認められる。これらの用例は、従属接続詞一般に認められる削除原則に従ったものであり、特に *because* に特殊な操作として認められるものではない。一方、現代的な（reference point 的な）用例は名詞類に（数は非常に少ないが）認められる。しかも、非常に早い時期からその発露は認められる。

4. COHA における *because* X の分布

次に、19 世紀以降のアメリカ英語のデータ（COHA）において、*because* X 型の表現がどのように分布しているのかを見ていく。ただし、*because* は因果関係の接続詞の中でも特に使用頻度が高いものであるため、関連するデータをすべて個人的に検証することは不可能であると考えられるため、一部のデータのための検証とする。また、Bergs (2018) と本稿での立場の違いを明確にする上でも、形容詞グループと名詞グループの分布状況の違いを確認することが重要であるため、この 2 つの品詞要素が補部として登場する用例を比較していくことにする。

COHA における *because* 補部の分布調査は、アクセス期間 2019/8/20~2019/9/15 で行った。形容詞に関しての調査は、*because* [j*] という検索記号列により、*because* の直後に形容詞が後続する事例のみを取り出し、500 ヒット目までに含まれている用例を確認した。これは、該当事例が 2 件ある組み合わせの途中までを確認することになり、該当事例が 1 件しか存在しない組み合わせ（hapax legomena）については確認していない。

- (26) 主文主語と同一の場合（各時代を通じて 136 例）

1820 This would at least be honest, though I think it would be unwise, **because** [it is] **unnecessary**.

1831 She was then an old woman, rather stout in form, ..., but looked upon by the neighbors as reserved and proud, **because** [she was] **unwilling** to speak of the circumstances which had brought dishonor on her name.

1836 His Majesty's government will not have forgotten, that the principle of compromise and equitable division was adopted by the King of the Netherlands in the line recommended by him to the parties; a line [which was] rejected by the United States, **because** [it was] **unjust to Maine**.

(27) 主文目的語と同一の場合 (12 件) 斜格目的語と同一の場合 (5 件)

1837 ...and I may say it now, **because** [it is] **necessary** for the support of the great cause in which you acted so early and decisive a part.

1872 He ate half a leg of mutton; did not taste the small dishes **because** [they were] **small**; drank champagne and burgundy as small beer during dinner, ...

1922 It should not be forgotten that all of our great historians have been men and were likely therefore to be influenced by a sex interpretation of history all the more potent **because** [it is] **unconscious**.

(28) 等位的用例 (48 件)

1835 Such a hope is often a prelude to a [more awful, **because unexpected**] doom.

1850 The whigs had the majority on their side, and the Democrats nothing but principle, and [**unanswered, because unanswerable**], arguments...

このデータベースで、限られた範囲内で確認した限り、形容詞補部の分布特徴は、OED と COHA で大きな違いは認められない。形容詞グループに関しては、一般に従属接続詞に認められる削除パターンの範囲を超えた事例は現れていない。もちろん、これはデータベースのごく一部の調査でしかないので、より広範囲の検索を行うことで異なる結果が得られる可能性もあるが、現時点での調査はここまでとしておきたい。⁶⁾

次に、名詞が補部に登場する場合をみる。ここでの検索記号列は **because** [n*] であり、ここでも 500 ヒット目までを確認した。名詞グループでも、これは該当事例が 2 件存在する組み合わせの途中までを確認したことになる。さらにここでは明らかな名詞句になる用例についても確認したいと考え、冠詞の例としてヒット件数が最も少ない **because an** の検索記号列についても追加して確認を行った。

(29) 主文主語と同一の場合 (10 例)

1849 On no other condition can we be distinguished, in principle, from Radicals and Destructives, and consistently profess to be conservatives, and friends of liberty, **because** [we are] **friends of order**.

1864 Dear Sylvia, you are an exceptional case in all respects, **because** [you are] **an extreme one**.

1891 Things looked dark just now, and Paul Henley was a dangerous enemy

because [he was] an unscrupulous one....

- (30) 主文の斜格表現と同一の場合 (1 例)

1914 “Oh, David, it’s going to be very hard for you—all **because** [you are] **an old fool**—”

- (31) 現代的用例 (1800 年代に 2 例、1900 年代前半に 5 例、後半 6 例、2000 年代 2 例)

1835 ...and, in truth, it was some considerable time before she began to lament her easy consent, and to feel that there was merit, **because** [there was] **pain**, in the sacrifice.

1912 Death is a phase of life, a redistributing of the type. Decay is another kind of growth. Yes, good in everything, **because law in everything, truth in everything, the sequence of cause and effect in everything**....

1938 Orders for the buying and selling of gold by private persons converge upon London **because London** is the greatest free market, for gold.

1960 “He hasn’t made love to me in two years!” she cried. “But it’s all right! **Because babies! His career**, you see! I mean it’s all right if we don’t have children!...”

1975 BILLY FISH: Was Sikander First a god?

CARNEHAN: No, Billy. No more a god than Dravot.

BILLY FISH: Then Priests must be mistaken about Imbra. Him not angry **because god marrying a mortal** – but because a son of man make pretend to be a god...

2001 SISTER: Why her? Why does she get the light?

MOTHER: Because.

SISTER: Because what?

MOTHER: **Because God**.

SISTER: **Because you**.

MOTHER Hush! She’s resting.

名詞グループの検索結果についてまとめると、形容詞に比べて遙かに用例は少ない。しかし形容詞は従属接続表現に広く認められるタイプの削除用例に限られているのに対して、名詞に関しては現代的な用例が散見される。つまり、OED の調査結果と同じになる。Bergs(2018)

は、このような使用頻度の違いから判断して形容詞グループが *because X* 表現の端緒となったと考えたのではないだろうか。

5. GloWbE における *because X* の分布調査

次に、GloWbE における *because* 補部の分布調査について述べる。調査のためのアクセス期間は、2019/9/16 ~ 2019/9/24 である。このデータベースは 2012 年のプログなどのネット英語表現データになるので、年代の表示は不要と考え、省略している。代わりに、このデータベースでは 20 カ国（アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、アイルランド、南アフリカ、インド、パキスタン、マレーシア、フィリピン、シンガポール、ナイジェリア、香港、ジャマイカなど）におけるインターネット英語の用例を集めていることから、該当例がどの国の用例であったかを示しておく。

まず形容詞補部の場合であるが、ここでは *because* [j*] ./././; という検索記号列を用いた。つまり、*because* の直後に形容詞が現れ、その直後に句読点が現れている場合のみを確認した。*because* + 形容詞の記号列のヒット件数は膨大になるので、節末や句末にある事例を確認しようとしたためである。ヒット件数の合計は 458 件であった。

ここで特筆すべきことは、このコーパスデータに至って、(35) のように形容詞グループにも reference point 的な用例が認められることである。つまり、名詞カテゴリーに限らず、他の範疇要素にも *because X* の用例が拡散していくことが認められるのである。

(32) 主文主語と同一の用例

- a. A shadow passed over the boy's face as he watched them, feeling that he ought to go away **because** [he was] **uninvited**, yet lingering because home seemed very lonely...

(United States)

- b. I can assure you that he got a job at McLaren, **because** [he was] **talented**, because he has great potential. (Great Britain)

- c. Men's dress is ugly, uncomfortable, dirty (because [it is] unwashable), unhealthy (because [it is] **heavy, tight and unventilated**)... (Great Britain)

- d. In that case, if 'I would apologise' is subjunctive, **because** [it is] **conditional**, it suggests that I would but I am not going to, because a further condition would first have to be satisfied. (United States)

(33) 主文目的語と同一の用例

- a. 36/60 were ready to support schemes of emancipation, 9/60 opposed emancipation **because** [it is] **impracticable**, and 3/60 were bitterly against it. (United States)
- b. I don't agree with everything that Burnham says, however: he sees the masses (anybody outside the ruling class) as almost powerless, **because** [they are] **unorganized** ... (United States)
- c. I hate it when writers stick something into the script **because** [it is] **cool**, instead of explaining logically how such a thing could happen. (Great Britain)

(34) 等位的用例

- a. Although his work could not be classed as scholarship in a modern sense, it not only is one of the [**most important, because unique**], sources of the lives and biographies of the ancient thinkers,... (Great Britain)
- b. Reminding his reader that it was the love of money that created the unjust social conditions that led to the colonists' exile in the first place, McLachlan presents his emigrants as [**pure, because poor**], innocent victims of a corrupt society... (Canada)
- c. And I'm lucky enough, personally, to read a number of [**excellent, in part because unique**], blogs. :) (Jamaica)

(35) 現代的用例の登場

- a. We always prided ourselves on performing live, records never lived up to the band live and it's one of those things where you had to see it, to get the full jist of it. That's why bands like INXS and AC/DC broke through, because of that work ethic and **because** [they performed] live, they were unbelievable. (Australia)
- b. **Because** [we were] **thirsty**, God created water; **because** [we were in] **the darkness**, God created the fire; because I need a friend, so God sent you here for me, ... (Hong Kong)
- c. And holy CRAP, this game is gorgeous. Just mindbogglingly pretty. My fiancée doesn't play video games, but I'm going to have to load up a save for her just to show her the vistas, **because** [this is] **goddamn** [pretty and gorgeous]. (United States)

- d. If I were to try and fix Ann, just as her friends try to fix gay people and women, I would get some of that summer ecstasy I was talking about and make her do it. We could start today, **because** [to start today is] **perfect**, it's a blue moon. (Great Britain)
- e. [**Because phone-in, because daily, because accessible**, because new level of transparency], means folk would use it to find out real-time government and opposition opinion on current issues and because they may want to ask something themselves. (Great Britain) ⁷⁾

では最後に、名詞補部の例について確認してみる。この場合、名詞句を構成していることが明確になるように、形容詞＋名詞の組み合わせで構成されている記号列をまず調査した。検索記号列としては、**because** [j*] [n*] . と **because** a/an/the [j*] [n*] . を用いた。つまり、形容詞＋名詞で構成された名詞句が **because** の補部に登場し、文末位置にある場合と、冠詞が形容詞＋名詞の前に登場して文末位置にある場合を確認してみた。ヒットした事例の合計は 181 件であった。

(36) 主節主語と同一

- a. The current design of furniture tend to be expensive than the earlier designs and they are commonly referred to **because** [they are] **the Contemporary types**. (New Zealand)
- b. There are lots of objects which can be chosen **because** [they are] **recyclable ones**. (India)
- c. These kinds of enthusiasts are generally known **because** [they are] **conventional enthusiasts**. (United States)
- d. These kind of Zebra labels in addition to Seiko labels are unable to merely utilized in this storage area bins, but to that particular, these may also be used **because** [they are] **correct trademarks**. (United States)

(37) 主節目的語と同一

By the time that the lamb leg is carried out, do not slice inside the meat yet. Serve it after 20 minutes. But you can also provide other dishes using the lamb leg **because** [it is] **the main ingredient**. (South Africa)

(38) 主節斜格と同一

- a. Most business owners who are organising a startup company first look to the business strategy plan **because** [it is the] **initial step**. (Australia) 冠詞も省略
- b. However naturally, generally there are additionally a fantastic line of on the net games built with Spiderman **because** [he is] **the primary protagonist**. (Tanzania)

(39) 現代的用例 (ブログ表現であり、意味不明なもの多数)

- a. Q: Some people refer to you as the greatest goalie of all time.
A: I don't believe that anybody's the greatest, **because** [they live in] **different eras**. I'm happy that I'm able to touch people and people think like that.
(Canada)
- b. no chance to go there... cause nobody wants to go with me.. and my friends never really like shopping with me **because** [they have] **different taste**. (Malaysia)
- c. I really missed having HBO **because** [I loved] **their series**. I called cable and said I wanted HBO but didn't want to pay anymore. (Canada)
HBO はケーブルテレビチャンネル
- d. I like summer for three reasons. The first one is **because** [I like] **outdoor soccer**.
(Canada)
- e. I left a twenty year marriage **because** [I suffered from] **escalating abuse**.
(Australia)
- f. He said education is the basis for development in the modern world adding that without education even our agriculture will stagnate **because** [we can only use] **obsolete techniques**. (Ghana)
- g. If we feel sad it's **because a chemical substance** [works], if we are happy it's **because a chemical substance** [works]. (Hong Kong)
- h. These days, appearance trends arise and go as cursory **because the newest smartphones** [change rapidly]. (Canada)
- i. He continued, "We don't have dungeon bosses that are that simplistic anymore..." I am going to go ahead and disagree with this. MC Bosses (in my opinion) were more difficult to their new counterparts simply **because** [you have to organise] **the 40-man team**. Ever tried to organise 40 internet strangers to work in unison as a well oiled, killing machine? (Great Britain)
- j. However, Jamaica is unable to ratify the United Nations Convention [against]

Torture [and] Other Cruel, Inhuman or Degrading Treatment or Punishment
because the archaic laws [of Jamaica go against it]. (Jamaica)

k. This living room look so elegant because the simple concept [of the designer is reflected]. Simplicity make a great look and feel the luxury sensations. (Great Britain)

l. I've also used non-dairy milk instead of water for an extra creamy sauce.

Notes: You can double this recipe if you want, but I've found that this makes plenty. I only use it sparingly or for special recipes that call for cream because the fat content [is high]. (United States)

(39)にあるように、reference point 的に用いられている用例は多数認められる。さらに、(40)にあるように because [n*] . の検索記号列を見るだけでも、たくさん事例は出てくる。これは because に裸名詞が後続し、それが文末要素となっている場合を表しており、名詞句ではなく、名詞が補部に登場している事例、ということになる。ヒット件数は 295 件であり、様々な名詞のバリエーションが認められる。

(40) because [n*] . の検索事例

because science/because reasons/because comedy/because school/because politics/
because sleep/because socialism/because statistics/because privilege/because
racism/because rain/because management/because unawareness/because religion/
because sadness/because bankruptcy/because agony/because family/because
fascism/because innocence/because deficit/because obesity/because Olympics/
because paradoxes/because ...

6. 調査結果のまとめ

5 節までの状況から、以下のように *because* X 型表現の発展状況についてはまとめることができるのではないかと考えられる。

- (41) a. GloWbE では形容詞に関しても名詞に関しても、現代的な用法が認められる。カテゴリーを超えた reference point 的用法が認められる段階に至ったと考えられる。
b. 名詞補部をとる場合にこそ、このような現代的な用法が古くから存在し、しかも現代においても多く認められることは、*because* の補部の性質の変化が、名詞グループにおいて始まったことを示唆していると考えられる。少なくとも 17 世紀から新

規表現の発露が認められる。21 世紀になって (レジスターの問題もあると思われるが) 新規用法が急速に広まっている。

- c. 形容詞補部に関しては 21 世紀に至るまで、従属節に生産的に認められる削除パターンからの逸脱はほとんど無いようである。現在問題となっている、カテゴリーを問わない補部を取る *because* X 型の構造は、やはり名詞補部から生じたものと考えられる。

このような用例は、単なる書き間違い、言い間違いでしかないと考えることもできるかもしれない。しかし、OED においても COHA においても、同じような「間違い」が分布しているのはどうしてなのか、GloWbE に至って、形容詞にも間違いが認められるようになり、それまではなかなか認められなかったのはどうしてなのか、といった問題を考えるとき、単なる「言い間違い」では説明がつかないと思われる。そこには新しい構造が生じ、徐々に発展していった経過が見て取れるのであり、言語発展の有り様の一つの具体事例だと考えることができるであろう。

新しい表現形式の発展は、既存の文法体系から見れば、それまでの文法形式を破る誤用であり、最初のうちは許容されることもない。場合によっては、そのまま誤用として葬り去られ、忘れ去られていくこともあるだろう。その一方で、少しずつ使用頻度が高まり、市民権を得ていく用法もあるはずである。新しい用法の発達に関しての以下のバイイの言説は非常に示唆的なものであると思われる。

(42) “Aussi c’est la langue de demain qui se prépare dans une foule d’incorrections.”

(Bally 1952: 32)

(It is the language of tomorrow which prepares itself in a mass of mistakes.)

※本稿は、科学研究費 基盤研究 (C)18K00646 の助成を受けて行った研究の一部である。

注

- 1) Huddleston & Pullum (2002: 1267) は a subject と述べているのみであり、その主語にどのような制限が与えられるものであるかは明示していない。Givón (1993: 10) は分詞表現の意味上の主語は、主節の主語または目的語であるとしている。
- 2) OED は、従属節の省略された主語は主節の主語と同一指示になるとしている。(または主節の動詞を修飾する副詞や副詞句が後続するとしている)

1592 It was objected, though untruly, that they were ydle.

- 3) 参考までに OED でも、このような等位的用法も節からの ellipsis によって生じたものと記載されている。

though II conj. 1b.

With ellipsis in the subordinate clause: usually directly preceding an adj., pple., n., or adj. phr. qualifying the subject of the main clause, or an adv. or adv. phr. qualifying the verb.

1599 The [**base (though bitter)**] disposition of Beatrice.

- 4) *yoakles* は形容詞なので、後半部分はこのグループの用例ではなく、形容詞グループの用例としてカウントしている。
- 5) 仮に (20) の例もカウントするとしても、*because* が節や *of* 句を補部を取る事例は 14 世紀には OED の用例として記載されているので、その時点で新形式を造り出すための入力構造は両方揃っていたことになる。
- 6) データに含めなかった用例として以下のようなものもある。

1834 B. I much thank you very.

A. The road pleasant?

B. Not pleasant; road upon difficult travel.

Jl. I thought sir the road all was sit boat come.

B. Indeed is; but this year **because hot very**, therefore river road all dried. (中国人の発話)

1943 Power, essential for operating the mines and mills, was at first supplied by wood, but as near-by areas were cut off, the cost **because greater**. (the cost became greater の間違いと考えられる)

- 7) COHA に関して、追加調査を *because* [j*] . という検索記号列で行ったが、69 例のすべてが主節の要素 (主語、目的語または斜格要素) と同一の「主語 + 繫辞動詞」が削除された事例であった。つまり、COHA には reference point 的な形容詞補部の事例が含まれている可能性は低いと考えられる。

参考文献類

Bally, Charles (1952) *Le Langue et la Vie*. Genève: Librairie Droz.

Barlow, Michael (2000) "Usage, Blends, and Grammar." in Barlow, Michael & Suzanne Kemmer (eds.) *Usage-based Models of Language*. 314-345. Stanford: CSLI.

Bergs, Alexander (2018) "Because Science! Notes on a Variable Conjunction." In Seoane, Elena, Carlos Acuña-Fariña and Ignacio Palacios-Martínez (eds.) *Subordination in English*. 43-59. Berlin: Mouton de Gruyter.

Bohmann, Axel (2016) "Language Change Because Twitter? Factors Motivating Innovative Uses of Because Across the English-Speaking Twittersphere." in Squires, Lauren (ed.) *English in*

- Computer-Mediated Communication: Variation, Representation, and Change*. 149-178. Berlin: Walter de Gruyter.
- Davies, Mark. (2010-) *The Corpus of Historical American English (COHA): 400 million words, 1810-2009*.
- Davies, Mark (2013) *Corpus of News on the Web (NOW): 3+ billion words from 20 countries, updated every day*.
- Davies, Mark (2013) *Corpus of Global Web-Based English: 1.9 billion words from speakers in 20 countries (GloWbE)*.
- Givón, Talmy (1993) *English Grammar*. Vol. 2. Amsterdam: John Benjamins.
- Hopper, Paul & Elizabeth Traugott (2003) *Grammaticalization*. 2nd Edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huddleston, Rodney & Geoffrey Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kanetani, Masaru (2015) "On the New Usage of *Because*," *Studies in Language and Literature* [Language] 68, 63-80. Tsukuba University.
- Kanetani, Masaru (2016) "A Note on the *Because* X Construction: With Special Reference to the X-Element," *Studies in Language and Literature* [Language] 70, 67-79. Tsukuba University.
- Kanetani, Masaru (2019) *Causation and Reasoning Constructions*. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald (1993) "Reference Point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4: 1-38.
- 岡田禎之 (2020) 「因果的結束関係を表す副詞句と語彙概念拡張」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第60号. 1-40. 大阪大学大学院文学研究科.
- Turner, Turner, Mark & Gilles Fauconnier. 1995. "Conceptual Integration and Formal Expression." *Metaphor and Symbolic Activity* 10: 183-204.

ブログ類

- Carey, Stan (2013) "'Because' has become a preposition, because grammar" Sentence first.
<https://stancarey.wordpress.com/2013/11/13/because-has-become-a-preposition-because-grammar/>
- McCulloch, Gretchen (2013) "Why the new "because" isn't a preposition (but is actually cooler)" All Things Linguistic.
<https://allthingslinguistic.com/post/72252671648/why-the-new-because-isnt-a-preposition-but-is>
- Pullum, Geoffrey (2014) "The promiscuity of prepositions" Language Log.
<https://languagelog.ldc.upenn.edu/nll/?p=9558>

Schoebelen, Tyler (2014) "Innovating because Innovation," Corpus Linguistics WordPress. 2014/1/15

<https://corplinguistics.wordpress.com/2014/01/15/innovating-because-innovation/>

Whitman, Neal (2014) "Why is the Word of the Year "Because"? Because..." Visual Thesaurus.

<https://www.visualthesaurus.com/cm/dictionary/why-is-the-word-of-the-year-because-because/>

On the Historical Development of *Because X* Construction

Sadayuki OKADA

Abstract: I presented a hypothesis in my former paper on the generation of *Because X* Construction, which is recently paid much attention to. The blending of two input structures (*because* + clause and *because* + of NP) is supposed to yield a new one (*because* NP), which in turn extends to select any element of lexical categories as its complement, just as long as it works as a reference point of the relevant proposition. Bergs (2018), however, claims that *because X* started from adjective complements and extended to the nominal category, with a search of the Corpus of Historical American English (COHA). Here in this paper, I made a survey of the citations of *because* in the Oxford English Dictionary (OED), together with additional searches through COHA and the Corpus of Global Web-based English (GloWbE), to trace the historical development of *because X*. The findings suggest that the origin of this structure is at least as old as the 17th century, and that the NP complements were the oldest forms of this innovative construction, which then extended to include other lexical categories as its complement.